

「教育」と「Education」

東北大学大学院理学研究科 山下正廣

スポーツメンタルトレーナーの白石先生は「心を鍛える言葉」という著書の中で「教育と Education」の違いについて興味深い意見を述べている。「教育」という言葉の語源は明治時代に「Education」という言葉が日本にもちこまれ、これを「教育」と訳して以来、いまでは日本人の誰もが普通に用いている。しかしながらこの「教育」という言葉は実は、目上の人が目下の人に教える、あるいは知っている人が知らない人に教える、師匠が弟子に教えるというように、上から下へのトップダウン型に近い意味を持っている。「Education」という英語の本来の意味はどのようなことであろうか？例えば小学生の息子が試験で 90 点の答案用紙を持って帰ってきたとしよう。日本人のほとんどの親は「お前はここを間違えたから 100 点を取れなかったんだ。もっと頑張れ。もっと気をつけろ。そうすれば 100 点を取れるようになるだろう」というであろう。一方、英国では 90 点を取った息子に対して「Good boy! Good boy! お前は 90 点も取って素晴らしいじゃないか。ここを間違えなかったらもっと素晴らしいよ」というのである。つまり、「Education」という言葉は子供の能力を最大限に引き出すという意味を持っているのである。そのために 90 点を取ってきた息子に対して最大限に誉めるのである。一方、日本人は 90 点を取ってきた息子に対して始めに誉めずに、なぜ間違えたのかを責めるために、息子はやる気をなくすわけである。つまり、英国では子供に対してポジティブに考えながら育てるのに対して、日本ではネガティブに考えながら育てるのである。このために日本人は本番で実力あるいは実力以上の力を出せないのに対して、欧米人は本番で実力を出せるのである。このようなことが先に述べたように選手を応援するとき「頑張れ」と「Enjoy」の違いとして現れるのであろう。

このことは研究に対しても言えることである。院生や学生に研究テーマを与えるときにはデイスカッションを十分に行い、彼らの個性や気力をうまく判断して、彼らの実力を最大限に引き出すようにすべきである。つまり院生や学生に対して「教育」をするのではなくあくまで「Education」をすべきである。昨今の無気力な院生や登校拒否の多い院生を見ているとつくづく「Education」が今の日本の大学には重要であると考えさせられる。